

高等学校国語教科書における「羅生門」定番化に関する一検討 — 1973年から2007年における「羅生門」と「舞踏会」の採録状況の変遷に着目して —

Joshua Metcalf COLE

1. はじめに

本研究の目的は、高等学校「国語総合」の全教科書に採録されている「羅生門」の定番化の要因について、同一作者による「舞踏会」との採録状況の変遷に着目しながら、新たな資料に基づいて幸田（2013）と川島（2013）の解釈をより厳密に検討することである。

「羅生門」が定番教材となった要因について解釈を提示した先行研究として幸田（2013）と川島（2013）がある。

幸田（2013）は、「羅生門」の〈定番化〉は、昭和40年代の読解指導の展開や文学研究における「作品論」の流行のもとに急速に進行し、「国語Ⅰ」時代の「精選」による淘汰を潜り抜け、その後の少子化に伴う教科書マーケットの縮小の中で教科書採択時における不可欠の要件として変容していった（p. 20）」と主張した。

一方、川島（2013）は、「羅生門」をはじめ小説教材の定番化という過程を二つのステップに分けた。1970年代～1980年代を「定番化確立期」と名付け、その背景には「主題重視の学習指導要領の記述と適当な教材の不足（p. 153）」があったと主張した。そして、1990年代～2000年代を「定番化極限期」と名付け、その背景には「少子化と「教科書会社の淘汰」への発行元の脅え（p. 153）」があったと主張した。

彼らの解釈には肯定できる部分が多いものの、その解釈を導き出す方法に課題が残されていると考えられる。彼らは共に、高等学校学習指導要領（以下、高等学校学習指導要領の各改訂版を〇〇年版と省略する）と「羅生門」の関係を中心に議論を展開している。しかし、「羅生門」の定番化の要因についてより説得力のある解釈を導き出すためには、「羅生門」が採録されず別の教材が採録された時期や教科書もあることに着目すること、つまり他の教材との関係性の中で「羅生門」の定番化の要因を検討することが必要だと考えられる。

他の教材との比較という方法を用いて「羅生門」定番化の要因を検討する場合、最も適している教材は同一作者による「舞踏会」だと考えられる。なぜなら複数の教科書会社が採録した芥川小説を「舞踏会」から「羅生門」に変更したり「羅生門」から「舞踏会」に変更したりということを行っているからである。このような関係にある教材として、他に「蜜柑」があるが、最もその採録の変更が多いのは「舞踏会」である。以上より、他の教材との関係性の中で「羅生門」の定番化の要因を検討する場合、「舞踏会」を取り上げることが最も適していると考えられる。

2. 研究の方法

研究対象は「舞踏会」と「羅生門」の両作品を収録したことがある教科書であり、かつ教科書の旧版と新版を比較した場合、片方に「舞踏会」が収録され、もう片方に「羅生門」が収録されている教科書である。このように対象を絞ると、表1のように、東京書籍、学校図書、中央図書、旺文社、尚学図書の計5社の教科書①～⑨に限定される。本研究では、①中央図書以外の教科書を対象とする。⁴⁾ 対象期間は、昭和45年版が施行された1973年から、「羅生門」が収録された旺文社版の教科書が使用されなくなった2007年までとする。

表1 研究対象とする教科書会社が該当する科目用教科書に収録した芥川小説（1960年～2006年）

年度	高等学校 学習指導要領	科目	中央図書	東京書籍 (国語シリーズ)	尚学図書 (新選シリーズ)	学校図書 (高等学校シリーズ)	旺文社 (高等学校シリーズ)
1960	昭和31年版	国語(甲)	①「舞踏会」	「西郷隆盛」			
1963			①「羅生門」	「或日の大石内蔵助」	「鼻」		
1967			「羅生門」	「或日の大石内蔵助」	「鼻」		
1968	昭和35年版		「羅生門」				
1970			「羅生門」	「或日の大石内蔵助」	「鼻」		
1971		現代国語					
1973	昭和45年版		「枯野抄」	「舞踏会」	「舞踏会」	芥川小説 未収録	「羅生門」
1976				「舞踏会」	「舞踏会」	芥川小説 未収録	「羅生門」
1979				②「舞踏会」	③「舞踏会」	「羅生門」	「羅生門」
1982				②「羅生門」	③「羅生門」	「羅生門」	「羅生門」
1985	昭和53年版			「羅生門」	「羅生門」	「羅生門」	「羅生門」
1988		国語 I		「羅生門」	「羅生門」	⑥「羅生門」	「羅生門」
1991				「羅生門」	④「羅生門」	⑥⑦「舞踏会」	⑧「羅生門」
1994	平成元年版			「羅生門」	④⑤「舞踏会」	⑦「羅生門」	⑧「舞踏会」
1998				「羅生門」	⑤「羅生門」		⑨「舞踏会」
2003	平成10年版	国語総合		「羅生門」			⑨「羅生門」
2006							
ライトグレー:「舞踏会」収録							
ダークグレー:「羅生門」収録							

②東京書籍（国語シリーズ）と③尚学図書（新選シリーズ）も、昭和53年版が施行されたことをきっかけに、1982年の教科書に収録された芥川小説を「舞踏会」から「羅生門」に変更した。学校図書（高等学校シリーズ）は、④1991年の教科書に収録された芥川小説を「羅生門」から「舞踏会」に変更した。ところが、平成元年版が施行されたことをきっかけに、⑤1994年の教科書に「羅生門」を復活させた。尚学図書（新選シリーズ）は、平成元年版が施行されたことをきっかけに、⑥1994年の教科書に収録された芥川小説を「羅生門」から「舞踏会」に変更した。ところが、⑦1998年の改訂版に「羅生門」を復活させた。旺文社（高等学校シリーズ）は、平成元年版が施行されたことをきっかけに、⑧1994年の教科書に収録された芥川小説を「羅生門」から「舞踏会」に変更した。ところが、平成10年版が施行されたことをきっかけに、⑨2003年に「羅生門」を復活させた。

本研究が対象とした資料は以下の通りである。

まず、これまでの議論を把握するため、幸田（2013）・川島（2013）など、「羅生門」の定番化に関する先行研究を検討した。次に、教科書編集者がどんな狙いで「羅生門」及び「舞踏会」を採録したのかを把握するため、前述した①～⑨の教科書及び指導書を調査した。加えて、各教材

に対する現場の教師及び生徒の反応を把握するため、対象期間中に報告された「羅生門」及び「舞踏会」に関する授業実践を検討した。また、各教材に対する研究者の反応を把握するため、「羅生門」及び「舞踏会」に関する教材研究も検討した。最後に、共通教材としての「羅生門」の採用に対し、批判的なスタンスを取っていた日本教職員組合編『教科書白書』も取り上げて検討した。

第3節では、②東京書籍（国語シリーズ）及び③尚学図書（新選シリーズ）の事例を取り上げ、昭和53年版が施行されたことをきっかけに、1982年の教科書に収録された芥川小説が「舞踏会」から「羅生門」に変更された要因を検討する。第4節では、④⑤学校図書（高等学校シリーズ）・⑥⑦尚学図書（新選シリーズ）・⑧⑨旺文社（高等学校シリーズ）の事例を取り上げ、編集者が一度教科書に収録された芥川小説を「羅生門」から「舞踏会」に変更したにもかかわらず、再び「羅生門」を復活させた要因を検討する。最後に「羅生門」が定番教材となった要因について本論文の解釈をまとめ、今後の課題を述べる。

3. 昭和53年版施行に伴った「舞踏会」から「羅生門」への変更

昭和45年版に準拠した「現代国語」の教科書に「舞踏会」を採録した出版社は、東京書籍と尚学図書⁹の2社である。昭和53年の改訂において、「現代国語」という科目がなくなり、その代わりに1学年では現代文・古文・漢文を総合的に扱う「国語Ⅰ」という新しい科目が設けられた。それをきっかけに、東京書籍と尚学図書⁹はそれぞれの「国語Ⅰ」の教科書から「舞踏会」を外し、代わりに「羅生門」を採録した。

この時代における「舞踏会」から「羅生門」への変更を促した要因は何か。当時の教材研究や授業実践記録などを調べた結果、以下の二つの要因が可能性として考えられる。一つ目は、現場の教師の報告から、「舞踏会」は当時の生徒と教師自身の評判があまり良くなかった点である。二つ目は、「舞踏会」より「羅生門」の方が教材として適していると研究者と実践家が共に主張していた点である。以下、それぞれの要因について詳述する。

3.1 「舞踏会」に対する生徒と教師の評判の悪さ

昭和45年版施行中（1973年－1981年）に発表された「舞踏会」の授業実践報告として、渡辺（1974）¹⁰と船登（1976）がある。両者は「舞踏会」に対する生徒の評判について言及した。両者とも「舞踏会」に対する生徒の評判の悪さが窺える。加えて、それを実際以上に悪く捉える教師の姿も見られ、教師も「舞踏会」に対して否定的な印象を持っていたことが分かる。

渡辺（1974）は、東京書籍版『現代国語Ⅰ』の単元「小説1」に収録された小説（芥川龍之介「舞踏会」と志賀直哉「濠端の住まい」）の第一次感想について挙手による調査を行い、以下の結果が出た（表2参照）。

表2から分かるように、2編のうち、「舞踏会」が「おもしろい」と答えた生徒は非常に少ない。また、渡辺（1974:490－491）は授業後も同様の調査を行い、「舞踏会」の支持者が6名に上がったと述べ、作品に対する生徒の評判の悪さは十分に改善されなかったと報告した。

表2 「舞踏会」「濠端の住まい」の第一次感想の調査結果（渡辺，1974:481）
2クラス（男子92名）

小説	おもしろい	普通	どちらともいえぬ
「舞踏会」	3	60	29
「濠端の住まい」	62	20	10

渡辺（1974:481）は、「舞踏会」に対する生徒の評判の悪さの原因について、作品の背景に関する親しみのなさ、主題や語句の難しさを挙げた。生徒の感想を参照すると、他に作り話や事件のない話への抵抗感もあったと考えられる。また、男子校での実践のため、主人公が女子であることも、作品に対する生徒の評判の悪さに貢献した可能性がある。

しかし、渡辺（1974）の報告には、「舞踏会」に対する生徒の評価を必要以上に悪く捉える彼自身の姿も窺える。それが表2の項目の解釈に一番よく現れている。つまり、「普通」と「どちらともいえぬ」という項目の解釈がポイントとなる。彼は「おもしろい」の項目だけを見て、生徒の反応を比較しているようである。つまり、「おもしろい」以外の項目を全て「つまらない」と解釈しているわけである。しかし、「どちらともいえぬ」と答えた生徒全員にとって「舞踏会」が「つまらない」と解釈しても不思議ではないとはいえ、「普通」と答えた生徒全員にとっても「つまらない」と解釈することには無理があるだろう。

船登（1976）の実践報告は尚学図書という教科書会社の機関誌『国語展望』に収録された。彼は、尚学図書版『高等学校新選現代国語一』の単元「小説1」に収録された芥川龍之介「舞踏会」（井上靖「投網」と一緒に収録）の読後感について、渡辺（1974）と同様、挙手による調査を行った。「結果は、おもしろかった、どちらかと言えばおもしろかったの計と、おもしろくなかった、どちらかと言えばおもしろくなかったとは、両者相半ばした（船登，1976:46）」と述べた。この結果だけでは、必ずしも生徒の「舞踏会」に対する評価が低かったとは言えない。しかし、彼はこの結果について生徒の「舞踏会」に対する評価が低かったと解釈した。その原因について自身の指導力不足と「舞踏会」の主題と生徒の生活の実態がかけ離れていることの2点を挙げた。

3.2 「舞踏会」より「羅生門」の方が教材として適しているという主張

「舞踏会」より「羅生門」の方が教材として適していると主張したものとして、石崎（1975）と船登（1976）がある。

石崎（1975）⁵⁾は、増淵恒吉ほか編『高等学校国語科教育研究講座 第3巻 現代国語（2）小説1』（有精堂出版）に収録された教材研究である。「羅生門」を中心に検討する論文であるが、「付」として「舞踏会」と「雛」の2編にも触れる。その2編について、「『羅生門』におけるような教材の特質がみられないゆえ教えるに^マくいのではないか（石崎，1975:91）」と指摘する。その「特質」として、石崎（1975）は①短編集『羅生門』とともに、「歴史小説家芥川龍之介のイメージを^マいやがうえにも彷彿させる（p. 79）」こと、②日本古典文学との関連があること、③その作品

の主題に倫理的な問題を取り上げていることの3点を挙げた。とくに「舞踏会」に比べ「羅生門」の方が優れた教材である理由として、必ずしも倫理的な問題を扱うことだけが適した教材の条件ではないと断りながらも、倫理的な問題を扱う教材の方が「教師にとっては教えやすく、生徒のほうも強い関心をいただくことはもちろんである（p.80）」と述べた。

また、船登（1976）も「羅生門」と「舞踏会」の主題を比較して、「羅生門」の方が教材として適していると主張した。

「私は花火のことを考えていたのです。我々の生のような花火のことを」という〔引用者補注：「舞踏会」の〕主題が、「羅生門」「鼻」の場合のように、ストレートに今の生徒に伝わるだろうかという軽い疑念を持った。「生のような花火」という認識は、今の学習者の意識にはたして実感をもって受け止められるだろうかという思いである。（船登、1976:42）

なお、彼は、授業を終えた時点においても、現代の高校生の実態を踏まえて、作品で扱われている主題の観点から「舞踏会」よりも「羅生門」の方が適しているという趣旨の発言をした。

現代の高校生の問題意識に答え得るような、しかもより質の高い主題の文学作品をぶっつけ、その深部を揺り動かすことが必要であろう。（改行）その意味で言えば、芥川の短編作品の中では、「羅生門」が最も教材としての有効性を発揮し得るのではなかろうか。乱世の生と死との限界状況の中で衝突する醜悪なエゴイズムの世界は、今の生徒にも衝撃を与えるに十分である。（船登、1976:46）

石崎（1975）と船登（1976）の主張には共通点が多い。例えば、船登（1976）が述べた「現代の高校生の問題意識に答え得るような、しかもより質の高い主題の文学作品（p.46）」は、石崎（1975）が指摘したような、主題に倫理的な問題を取り上げた文学作品であると一致しているだろう。加えて、両者はそのような教材が教えやすいと考えている。そのような作品の主題が生徒に理解しやすいからであると、船登（1976）が述べる。また、両者は生徒がそのような教材を好むと信じている。石崎（1975）は生徒がそのような教材に「強い関心をいただく（p.80）」と述べ、船登（1976）はそのような教材が生徒にとって衝撃的であると述べている。最後に、両者は「羅生門」には前述した特徴があり、「舞踏会」にはないと考えている。

以上のように、研究者と実践家の両方が、作品で扱われている主題を根拠として「羅生門」の方が「舞踏会」よりも教材として適していると考えていたことが分かる。

4. 昭和53年版～平成10年版施行中にみられる「羅生門」と「舞踏会」の採録状況の変遷

昭和53年版の新課程が1982年に施行された。昭和53年の改訂において、それまで20年間続いた「現代国語」「古典」という、現代文を古文・漢文から完全に分けて別々の科目で履修する科目編成がなくなった。その代わりに1－2学年では現代文・古文・漢文を総合的に扱う「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」、3学年では「現代文」「古典」という新しい科目が設けられた。「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」「現代

文」という科目は、平成元年版の施行（1994年）にも引き続き継続され、平成10年版の施行（2003年）まで続いた。

表3に示しているように、新課程が開始した1982年の「国語Ⅰ」用の教科書のうち、「羅生門」を採録したものは、17種中15種（88%）である。採録した会社数は、13社中12社（92%）である。これは幸田（2013）や川島（2013）が指摘する「羅生門」の定番化が確率した時期である。ただし、表3からは1985年・1988年・1991年に各社「国語Ⅰ」用の教科書の改訂版や新刊が出るたびに、「羅生門」の採録率がだんだん崩れていったことが分かる。それは、編集者が「羅生門」よりも、「蜜柑」（1985年・1988年・1991年）、「舞踏会」（1991年）、「幻灯」（1991年）などの芥川小説を選定したり、あえて芥川小説を選定しなかったりした教科書数が増えたためである。この採録状況の揺らぎは、平成元年版が施行された1994年から徐々にみられなくなっていった。しかし、「国語Ⅰ」用の教科書に「舞踏会」や「蜜柑」を選定したり、芥川小説を全く選定しなかったりする現象は、平成10年版が施行され、新課程の「国語総合」用の教科書の全種類に「羅生門」が採録されるようになる2003年まで出版され続けたのである。

表3 芥川小説収録教科書と未収録教科書（1982年－2007年）

作品・[タイトル]	「国語Ⅰ」(昭和53年版)				「国語Ⅰ」(平成元年版)		「国語総合」(平成10年版)	
	使用開始年度				使用開始年度		使用開始年度	
	1982	1985	1988	1991	1994	1998	2003	2007
蜘蛛の糸					1			
幻灯				1	1	1		
鼻						1		
薔	1	1						
舞踏会				1	2	1		
蜜柑		1	2	2	2	3		
羅生門	15	16	17	14	19	25	20	24
芥川小説未収録	1	2	3	5	1	2		
合計	17	20	22	23	26	33	20	24
「羅生門」の採録率	88%	80%	77%	61%	73%	76%	100%	100%

この時代における「羅生門」→「蜜柑」「舞踏会」など→「羅生門」という選定の揺らぎの要因は何だろうか。幸田（2013）は、この現象を以下のように説明した。

空白期間の存在は〈定番化〉への抵抗感の現れであり、敢えて別の教材を提示することで新しさを主張しようとした積極的試みだったと解釈できる。しかし、その後の復活はそうした代替物よりも、「定番」を求める現場の声の強さを物語っている。(p. 18)

果たして幸田（2013）の解釈は妥当であろうか。まず、「空白期間の存在は〈定番化〉への抵抗感の現れ (p. 18)」かどうかを4.1で検討する。次に、「その後の復活はそうした代替物よりも、「定番」を求める現場の声の強さ (p. 18)」の現れかどうかを4.2で検討する。

4.1 「国語Ⅰ」時代に見られる「羅生門」から「舞踏会」への変更

「国語Ⅰ」時代に見られる「羅生門」から「舞踏会」への変更の背景として「羅生門」ないしは

芥川小説が抱える教材としての問題点（佐々木，1968；日本教職員組合編，1972・1981・1984・1993など）という要因が考えられる。なお，佐々木（1968）と日本教職員組合編（1972・1981・1984・1993）では「羅生門」が抱える問題点として異なる理由を挙げている。

4.1.1 佐々木（1968）の主張

佐々木（1968）⁶⁶は、「羅生門」を教材として採用する意義と，その課題の両方に関わる発言を，雑誌『国文学』の特集「芥川龍之介の魅力」において「高校国語教材としての芥川文学」という記事の中で行った。「羅生門」を採用する意義については，前節の議論に遡るが，石崎（1975）や船登（1976）とはほぼ共通する内容を述べた。要点をまとめると，以下の2点に整理できる。

意義その①としては，「羅生門」の主題は生徒にとって理解しやすいという点である。登場人物の心理の推移を辿ることによって主題に至る構成になっているため，ほとんどの生徒は，自分でその方法を用いれば，限界状況に置かれた人間のエゴイズムを暴くことが主題であるという定説に近い解釈にたどり着くと述べた。自分でそういう解釈にたどり着けなかった生徒でも，グループやクラス全体での話し合いを通してその理解を示すと述べた。

意義その②としては，石崎（1975）も主張しているように，倫理的な問題を取り上げた作品には生徒が関心をいだくという点である。船登（1976）も主張していたように，「羅生門」の主題は生徒にとって印象に残りやすく，とくに人のエゴイズムが理解できる自分がいることに気づくことが，生徒にとって衝撃的である。下人の行為に共感する生徒も，それでも絶対的な正義感があると反論する生徒もあり，人間の本質について考えさせるという文学教育の目標の一つの達成に適している教材の一つであるという主張がなされている。

一方，「羅生門」を始め，芥川小説が教材として持っている課題については，以下のような発言を行った。

芥川は小説の中で人間の弱さなり，醜悪さなり，矮少さなりをあばいて見せてくれた。実に見事にあばいたと言ってよい。（中略）だがそれとは別に，人間には偉大で，崇高である面もあるはずだ。人生の傍観者の立場から，理智的な目で，人間の否定的側面のみをいくらリアルに描いて見せてくれたところで，そのみでは，人生を悩み始めた高校生にとって，救済にはならない。（中略）人間の持つ否定的側面と同時に，肯定的側面をも加味して，人間を全円的に把握したいと願う，この高校生の要求に応えるには，芥川文学は一面的すぎはしないだろうか。（佐々木，1968:128）

ここでは，芥川文学全体が持つ課題が指摘されている。しかし，後述する日本教職員組合（日教組）の議論を踏まえると，芥川文学の中でこうした課題を持たない作品（例えば「蜜柑」のように人間の肯定的な側面を描いた作品）が「国語Ⅰ」時代には「羅生門」の代替教材として選定されたと推察できる。

4.1.2 日教組からの批判

昭和45年版が施行された1973年に「羅生門」が小説教材として注目を集め始めた。その頃から、日教組はそれに対して批判的な態度をとっていた。日教組の批判は、年を追うごとにより鮮明になっていくが、その批判の要点は「羅生門」の扱っている題材が倫理的に高校生にふさわしくないという点である。

とくに日本教職員組合編（1984）は、「この作品では確かに小説学習として描写や心理、場面、作品の構成などはやり易い（p.28）」と小説の形式的な学習に優れている点を断りつつも、「羅生門」の教材としての問題性を最も明確に表明した。

結局のところ生徒は作品の主題をエゴイズムとして読みがちであるし、あらゆる価値や権威の崩壊という状況の中で何をやってもよいのだとするアナーキーな気分だけを残してしまう結果に終わることが多い。人間や社会の本質を見つめ、自己の深化を通して一步連帯へと進む方向にならないのである。教材の教育性という点で大きな問題があると思われる。（pp. 28-29）

このような批判に加えて注目すべき点は、筑摩書房を例に「「羅生門」をやめて芥川作品の中でも最も健康的な「蜜柑」とさしかえ（中略）たことは、教材の思想性・教育性という点から見ても大きな前進であろう。（pp. 24-25）」と評価した点である。さらにその後、「羅生門」を他の芥川文学に差し替えるか否かにかかわらず、「羅生門」を掲載していない教科書を一律に評価する立場をとった（日本教職員組合編、1993）。

以上、日教組の文学教育観は、小説の形式的な指導よりも内容の指導を重視していたことが明確である。そして、その観点から見れば、「羅生門」は生徒の健全な人間形成に適さない教材であり、むしろ、人間の肯定的な側面が見られる「蜜柑」のような小説の方が学習に値すると考えていたことが分かる。日本教職員組合編（1984）による「蜜柑」採録の評価が、当時の学校図書、旺文社、尚学図書が人間の一瞬の輝きを語る「舞踏会」を採録することを促した可能性がある。

4.2 学校図書・旺文社・尚学図書の教科書に見られる「舞踏会」から「羅生門」への復活

学校図書は1994年、旺文社は2003年、尚学図書は1998年に再び「羅生門」を採録した。その理由として、①日教組の影響力の低下、②教科書編集者にとって日教組の批判が正鵠を射なかったこと、以上2点が考えられる。

4.2.1 日教組の影響力の低下

日教組の影響力の低下の原因は、次の2点が挙げられる。1点目として、そもそも日教組は小・中学校を中心とした組織であり、高等学校教諭の組織加入率は低かったことである（JapanKnowledge, 2016）。2点目として、1982年から2007年にかけて日教組の全体加入率が51.1%から28.8%に下がっていることである（総務省統計局、2016）。つまり、高等学校教育への

表4 「羅生門」収録教科書と未収録教科書（1982年－2007年）

発行者	「国語Ⅰ」(昭和53年版)				「国語Ⅰ」(平成元年版)		「国語総合」(平成10年版)	
	使用開始年度				使用開始年度		使用開始年度	
	1982	1985	1988	1991	1994	1998	2003	2007
日書					羅生門			
東書	羅生門				羅生門		羅生門	
	羅生門				羅生門		羅生門	
学図	羅生門		舞踏会		羅生門		羅生門	
	芥川小説未収録				羅生門		羅生門	
三省堂	羅生門				羅生門		羅生門	
	羅生門		芥川小説未収録		羅生門		羅生門	
教出	羅生門				羅生門		羅生門	
光村	羅生門		芥川小説未収録		羅生門		羅生門	
大修館	羅生門				羅生門		羅生門	
	羅生門		芥川小説未収録	蜘蛛の糸	芥川小説未収録	羅生門		
数研	羅生門				羅生門		羅生門	
	羅生門		羅生門		羅生門		羅生門	
明治	羅生門		羅生門		羅生門		羅生門	
	羅生門				羅生門		羅生門	
右文	羅生門				羅生門		羅生門	
	羅生門		蜜柑		羅生門		羅生門	
筑摩	羅生門		芥川小説未収録	蜜柑	羅生門		羅生門	
角川	羅生門		芥川小説未収録	羅生門	羅生門		羅生門	
	羅生門		幻灯	鼻	羅生門		羅生門	
旺文社	羅生門				舞踏会		羅生門	
	羅生門				蜜柑		羅生門	
尚学	羅生門		羅生門		舞踏会		羅生門	
	羅生門		蜜柑		芥川小説未収録		羅生門	
第一	羅生門				羅生門		羅生門	
	羅生門				羅生門		羅生門	
桐原	羅生門				羅生門		羅生門	
	羅生門				蜜柑		羅生門	

ライトグレー:	一部の教科書に「羅生門」を敢えて選定しなかった発行者(1988年-2002年)
ダークグレー:	「羅生門」以外の教材が選定された期間(1988年-2002年)
黒:	発行者が教科書を発行していない期間

ライトグレー	一部の教科書に「羅生門」を敢えて選定しなかった発行者(1988年-2002年)
ダークグレー	「羅生門」以外の教材が選定された期間(1988年-2002年)
黒	発行者が教科書を発行していない期間

影響力は低く、教育政策全般への影響力が失われていく傾向にあった。これは、表4のダークグレーに染めてある部分に示したように、学校図書・旺文社・尚学図書などの教科書会社が1988年以降に発行した教科書には「羅生門」を選定しなかった主因が日教組の批判にあったとしても、それは過半数の教科書の教材選定には全く影響はなかったことから分かる。

4.2.2 教科書編集者にとって日教組の批判が正鵠を射なかった

教科書編集者にとって日教組の「羅生門」に対する批判が正鵠を射なかった理由について、①「羅生門」を小説教材として選定したねらいと乖離していること、②教材の扱い方次第で日教組の指導目標の達成が可能であること、以上2点が考えられる。

まず、教科書編集者が「羅生門」を小説教材として選定したねらいは、決して生徒に「あらゆ

る価値や権威の崩壊という状況の中で何をやってもよいのだとするアナーキーな気分（日本教職員組合編，1984:28-29）」にさせるためではなく，作品を通して，生徒に人生について考えさせるという小説単元の指導目標を達成するためである（阿川ほか編，1988・1994；大岡ほか編，1998；松村ほか編，1991；山本ほか編，1991）。⁷⁾ それは，「人間とは何か，あるいは人生いかに生きるべきか」という個に目覚めた近代人の疑問と発想が根底に横たわっている（大岡ほか編，1998:167）」と称された「羅生門」を通して，「『人生いかに生きるべきか』を問い始めたであろう多くの生徒たちの考えをより深める一契機となす（阿川ほか編，1988:272）」と編集者が考えたからである。

ここで，生き方について考えさせる小説教材として「舞踏会」でもふさわしいのではないかという反論もあるが，3.2で述べた船登（1976）が指摘したように，「我々の生(ヴィ)のような花火」という作品の主題は，年や経験の積み重ねで得る悟りのようなものであり，高校生が実感をもって理解するのは難しい。一方，「羅生門」では，「下人」という若者が，自分の生き方に悩みを抱えており，選択肢の好ましくない二者択一の決断を迫られている。生死に係わる問題を抱えている高校生は少ないにしても，選択肢の好ましくない決断を迫られている気持ちには同感しやすいだろう。以上の理由で，「羅生門」は「舞踏会」より高校生に生き方について考えさせる教材として選ばれるようになったと考えられる。

それから，「羅生門」の扱い方次第で日教組の指導目標の達成が可能である。日本教職員組合編（1984:28-29）は，「羅生門」が生徒に「あらゆる価値や権威の崩壊という状況の中で何をやってもよいのだとするアナーキーな気分」にさせ，「一步連帯へと進む方向に」向かわせないから，教材として不適切であると批判した。しかし，日教組の批判は，「羅生門」における老婆の論理を肯定した場合に成り立つ批判である。教科書編集者は却って老婆の論理を否定する立場をとった。例えば，岩上（1942）は，以下のように「羅生門」における老婆の論理を批判した。

餓に直面したからと言って，人間が他人の所有物を強奪することは許されない。それを許すならば，他から強奪したものを他によって強奪されても致し方がない。「餓のため」を理由としてあらゆる非人間的行為を許す老婆の論理は，老婆自身の上にかかる非人間的行為を与へることをも許さざるを得なかったではないか。それは論理の自己破滅ではないか。（p. 220）

指導書にも，岩上（1942）と同じように，老婆の論理における矛盾や破綻を指摘している記述がある（阿川ほか編，1994；大岡ほか編，1998；山田ほか編，2003）。このように老婆の論理の落とし穴について，生徒に考えさせることで，「羅生門」が日教組の批判に耐えられる教材となるだろう。

つまり，「羅生門」を採録した教科書編集者は，どちらかというところ，日本教職員組合編（1984）の主張より，その作品の扱っている題材は倫理的に問題があるからこそ，高校生にとってそれについて考え，話し合ったり作文を書いたりする価値があるという，3.2で述べた石崎（1975）や船登（1976）のような主張に同感したようである。

5. まとめ

「舞踏会」「羅生門」間にみられる教材としての選定の変遷の要因をまとめる。まず、1982年の東京書籍と尚学図書の場合、当時の「舞踏会」に関する教材研究や授業実践報告には、①「舞踏会」に対する生徒と教師の評判の悪さ、②「舞踏会」より「羅生門」の方が教材として適しているという主張がみられたため、「舞踏会」を「羅生門」に差し替えたと考えられる。次に、「国語Ⅰ」時代にみられる学校図書・旺文社・尚学図書の「羅生門」から「舞踏会」への変更の理由として、①「羅生門」より人間の肯定的な側面を描いた芥川小説を求めた声、②反社会的に読みやすい「羅生門」が教材として適さないと批判し、そのようなメッセージを持つ教材の定番化を反対し続けた日教組の声が相互に影響し合ったと考えられる。最後に、「羅生門」の教科書教材としての使用に反対した日教組などの声があったにもかかわらず、結局「羅生門」が定番化した要因として、①日教組の影響力の低下、②教科書編集者にとって日教組の批判が正鵠を射なかったこと、以上の2点が関連していると言えるだろう。

以上より、本論文における「羅生門」定番化の要因についての解釈を述べる。本稿でも議論してきたように、「羅生門」の定番化には、学習指導要領の変遷や、教科書出版会社、現場の教師、生徒の反応など様々な要因が絡み合って影響していたことが分かる。本稿では、「舞踏会」という「羅生門」との採録の揺らぎが頻繁にみられる教材と比較してこれらの要因を検討することで、幸田（2013）や川島（2013）があまり着目してこなかった、現場の教師の支持という要因についても光を当てた。

最後に、今後の課題を述べる。

高等学校国語教科書における定番の小説教材には、「羅生門」以外に中島敦「山月記」、夏目漱石「こころ」、森鷗外「舞姫」が挙げられる。これらの場合も、「舞踏会」のように代替教材のような役割を果たした同一作者による小説が存在する。例えば、中島敦「名人伝」、夏目漱石「それから」、森鷗外「寒山拾得」などである。これらの事例を個別に取り上げながら、代替教材ではなく、定番教材ならではの指導できることを明確にすることを今後の課題とする。

参考文献

- 阿川弘之ほか編（1988）『高等学校国語Ⅰ 新版：教授資料』学校図書株式会社
———（1991）『高等学校国語Ⅰ 改訂版：教授資料』学校図書株式会社
———（1994）『高等学校国語Ⅰ：教授資料』学校図書
石崎等（1975）「芥川龍之介「羅生門」（付「舞踏会」・「雛」）」増淵恒吉ほか編『高等学校国語科
教育研究講座 第三巻 現代国語（2）小説Ⅰ』有精堂出版株式会社，pp.78－91
岩上順一（1942）『歴史文学論』中央公論社
遠藤嘉基編（1960）『国語総合（改訂版）一：教授資料』中央図書出版社
———ほか編（1968）『高等学校現代国語一 改訂版：教授資料』中央図書出版社
大岡信ほか編（1994）『新選 国語一 指導資料』尚学図書

- (1998)『新選 国語一 改訂版 指導資料 現代文・表現編 上』尚学図書
- 川島幸希 (2013)『国語教科書の闇』新潮社
- 幸田国広 (2013)「『定番教材』の誕生：『羅生門』教材史研究の空隙」『国語科教育』74, pp. 14-21
- 佐々木啓之 (1968)「高校国語教材としての芥川文学」『国文学』13-15, pp. 125-128
- 総務省統計局 (2016)「日教組加入率・新採加入率の推移」<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001052573&cycode=0> (2016年7月7日確認)
- 高田瑞穂ほか編 (1978)『新訂 現代国語一：指導資料 1』東京書籍
- (1985)『改訂 国語 I：指導資料 第3分冊』東京書籍
- 日本教職員組合編 (1972)『新高校教科書を告発する』日本教職員組合
- (1981)『高等学校教科書の研究：'82年版 国語・社会の“比較”・分析』日本教職員組合
- (1984)『高等学校教科書白書：1985年版 高等学校教科書の分析と批判』日本教職員組合
- (1993)『高等学校教科書白書：1994年版の分析と批判』日本教職員組合
- 藤多佐太夫 (1976)「『舞踏会』論 (上) —問題の所在—」『山形大学紀要 (教育科学)』6-3, pp. 93-114
- 船登芳雄 (1976)「実践報告 <現代国語>『舞踏会』の指導について」『国語展望』44, pp. 42-47
- 松村明ほか編 (1991)『高等学校国語 I 三訂版：教授資料 第3分冊』旺文社
- (1994)『高等学校国語 I：教授資料 第1分冊』旺文社
- (1998)『高等学校国語 I 改訂版：教授資料 第1分冊』旺文社
- 文部省 (1978)『高等学校学習指導要領』大蔵省印刷局
- (1989)『高等学校学習指導要領』大蔵省印刷局
- (2004)『高等学校学習指導要領』国立印刷局
- 山田有策ほか編 (2003)『高等学校国語総合：教授資料』旺文社
- 山本健吉ほか編 (1976)『高等学校 新選 現代国語一 改訂版：指導資料』尚学図書
- (1982)『高等学校 新選 国語一 指導資料 現代文・表現編』尚学図書
- (1991)『高等学校 新選 国語一 四訂版 指導資料 現代文・表現編』尚学図書
- 渡辺宏 (1974)「文学指導の問題について—主題把握の実相と指導—」永山勇博士退官記念会編『国語国文論集』風間書房, pp. 479-492
- JapanKnowledge. (2016). Nikkyoso【日教組】. *Encyclopedia of Japan*. Retrieved July 7, 2016, from JapanKnowledge Web site: <http://japanknowledge.com>

注

- (1) 中央図書の教科書 (①) を対象としない理由は二つある。一つ目は、小説教材の変更があ

った1963年の当時、「羅生門」は教科書16種中1種（つまり、中央図書の教科書のみ）しか収録されておらず、まだ教科書教材としてほとんど普及していなかったためである。二つ目は、両教科書に「『羅生門』について」という生徒のレポートが作文の手本として教材になっており、レポートの論点の理解のために小説教材を「舞踏会」から「羅生門」に変更したと考えられるからである。つまり、芥川小説を「舞踏会」から「羅生門」に変更した理由は、レポートという他教材に合わせるためであり、それぞれの小説の質的なメリットに基づいたわけではないと思われる。

- (2) 尚学図書は当時、「現代国語」の教科書を複数種類出版していた。ここでは、「舞踏会」が採録されていた『高等学校新選現代国語一』（1973年）・改訂版（1976年）・三訂版（1979年）に着目する。
- (3) 尚学図書は当時、「国語Ⅰ」の教科書を複数種類出版していた。ここでは、「羅生門」が採録されていた『高等学校新選国語Ⅰ』（1982年）・改訂版（1985年）・三訂版（1988年）・四訂版（1991年）に着目する。
- (4) 藤多（1976）による「舞踏会」の教材研究は、題目に「舞踏会」がない渡辺（1974）の授業実践報告について詳しく検討し、その知名度を高めることに貢献した。
- (5) 日本近・現代文学研究者である。当時は跡見学園短期大学講師であった。
- (6) 当時、共立女子高等学校教諭であった。
- (7) それは、人間・社会・人生について考えを深める教材を取り上げることが強調されるようになった学習指導要領の記述を踏まえたためであったと考えられる。昭和53年版の科目「国語Ⅰ」の「理解」の指導事項として、聞いたり読んだりして「人間、社会、自然などについて考えを深めること（文部省、1978:12）」とあったが、平成元年版になると、それに加えて、教材に関する「内容の取扱い」の事項に「生活や人生について考えを深め、人間性を豊かにし、たくましく生きる意志を培うのに役立つ（文部省、1989:13）」かつ「人間、社会、自然などに広く目を向け、考えを深めるのに役立つ（文部省、1989:13）」教材を取り上げることが挙げられている。平成10年版により、科目「国語Ⅰ」の代わりに「国語総合」が新設されたにもかかわらず、前述した「内容の取扱い」の事項はいずれも継続された。教科書検定に通るためには学習指導要領の条件をクリアしなければならないため、教科書会社は上記のような記述を意識しながら、教材選定をした可能性が高い。